

世界をまるごと 体感する旅

ビジネススクリエイター／
国際教育NGO主宰
谷中修吾



アフリカの大地を自転車で
駆け抜けた。道中には、多
くの出会いがあふれていた
(モロッコ)

<Profile>

やなか・しゅうご
1978年静岡県出身。東京大学大学院
工学系研究科修了。外資・戦略コンサル
ティング会社を経て、新規ビジネス立
ち上げの専門家として起業。国際教育
NGO「Learning Across Borders」共
同ディレクターを兼務。ビジネス・ブレイク
スルー (BBT) 大学教員、ラジオDJ /
MCとしても活躍。

2009年、単身で世界一周の旅をした。毎日
が地球を巡る大冒険。3カ月弱で15カ国、最高に
エキサイティングだった。

「旅の目的は何だったのか」と、よく聞かれる。
答えはシンプルだ。ただ、地球を一周したかった
から。地球儀を回して眺めるだけで、こんなにも
たくさん国がある。そんな世界を全身で体感し
たい。その衝動こそが、旅の出発点だった。

当時、私はコンサルティング会社に在職中だっ
たが、自分の思いに従って動き始めると、不思議
と全てのタイミングがそろった。宇宙には、そう
いう力学が働いているのだろう。自分の仕事を回
しながら、世界一周が実現した。

日本から西回り。東南アジア、中東、アフリカ、
ヨーロッパ、北米、中米、大洋州と地球をグルッ
と一周した。毎日、気の赴くままに行き先を決め、
新しい町で、新しい人に出会い、新しい価値観を
体感した。イスラエルでは聖地エルサレムを巡礼
した後、兵士と共にバスに乗って死海にたどり着

自然と足を運びたくなるものだ。そして、思い切っ
て意中の国に足を運べば、現地の魅力と共に自ずと
課題も見えてくる。その実体験こそ、世界の問題を
理解するよりどころになると思う。

実は、そんな体感的な学びの機会にフォーカスし
た国際教育活動を、15年にわたって続けている。活
動の母体は、スタンフォード大学出身の教育者ドワ
イト・クラーク氏が設立した国際教育NGO「Le
-arning Across Borders」。私は共同ディレクター
として、日本の大学生を対象に、タイ、マレーシア、
シンガポール、ミャンマーに引率するスタディーブ
ログラムを企画・運営している。大切に行っているの
は、「Learning by Experience」。国際機関やNG
Oを訪ねたり、ファームステイをしたり、社会問題
の現場に足を運んだりする。そのインパクトは絶大
で、数週間で参加メンバーの意識が大きく変わって
いくのがリアルに分かる。

世界といかにつながるか。その方法は多種多様だ。
しかしどんなに技術が進歩しても、生身の体で現場
を体験することに勝るものはない。一度、異国に足
を踏み入れれば、そこには五感で味わう世界がある。
そして、人との出会いがある。その実体験があれば、
生涯にわたって、その国その街とのつながりは続く
ものだと強く思う。

百聞は一見にしかず。百見は一体験にしかず。だ
からこそ、ワクワクするテーマを入り口に、一度、
外へ飛び出してみるのには意味がある。そうすると、
あることに気付く。そう、世界は最高に面白いのだ
と。

き、湖上を漂流しながらキリストに思いをはせた。
タンザニアではランドクルーザーをチャーターして
マサイ族の村を訪ね、セレンゲティ国立公園でヌー
の群と交流した。キューバでは、革命家チェ・ゲ
バラの名のもとにシガーとモヒートで乾杯し、味わ
い深いクラシックカーに囲まれながらカリブの歴史
をしのんだ。

自分のワクワク感に身を任せてその土地に入っ
ていくと、面白いことに、出会った人々から芋づる式
にリアルな情報が入ってきた。本や雑誌では決して
知り得ることのない現地の魅力、美しく見える街の
背後に潜む根深い社会問題。それらは全て、世界の
ニュースを「自分ごと」として考えるトリガーにな
った。今でも中東のニュースを目にすればイスラエ
ルでの経験が思い出されるし、アフリカの記事を見
れば、タンザニアでの経験とひも付けて考える。知
っていることと実際に体験することの差は、そこに
如実に表れる。旅の経験は、かけがえのない世界と
のつながりを与えてくれた。

今あらためて世界各地に目を向けると、日々、さ
まざまな問題が起こっている。それらにきちんと目
を向けて、理解しようとする姿勢はとても大切だ。
ただ、そうは言っても、最初から「問題、問題：」
とストイックに教科書的なアプローチをするのも無
理がある。それよりも、自分がワクワクするテーマ
から世界とつながるほうが、一気に身近な話になる。
世界のスポーツを見たい、世界の芸術に触れたい、
世界の食を堪能したい。そんなシンプルな衝動を
大切に、自分らしい入り口で世界につながれば、



「Learning Across Borders」のスタディープログラムで、日本の大学生
を引率してバンコク郊外の村にファームステイ (タイ)



野生の動物たちが群がる草原を、ランドクルーザーで一気駆け抜けた
(タンザニア)



マサイ族の村を訪ねると、村長の家族が出迎えてくれた (タンザニア)